



2012年4月16日(月) 開催

テーマ:「団塊ファシズムの出現？」

報告者: 藤 和彦(主任研究員)

概要

### 1. 団塊世代の65歳定年が始まる

1947～49年に出生した「団塊世代」が現在664万人に上るが、今年から本格的に定年退職を迎える。団塊世代は日本が最も貧しい時代に幼少期を過ごしたものの、今では最も余裕がある世代。しかし、私生活の面では団塊世代の男性の15%が「友達がいない」など問題を抱えている。団塊世代は「組織」の中でしか生きてこなかったため、個人になったとき、単に金銭的な安定だけで、精神的に安定するのか疑問視する声がある。「組織」から出た定年退職者は、叱ることや苦情を言うことが社会的な教育と感じているが、問題の解決に結びつかないどころか社会を苛立たせる事態も生じさせている。

PFドラッカーは、19世紀末のウィーンの経済発展が急激だったため、当時のウィーン市民は「金銭神経症」に罹っていると断じた。「金銭神経症」とは、「そのうち貧乏になるのではないか」とか「稼ぎが不十分である」という絶えざる恐怖に苛まれていることを指すが、当時のウィーン市民の間には、お金には興味がないと称しながら、まるで憑かれたように絶えずお金を話題にする習慣が生まれていたが、戦後の日本の企業社会の興亡史を生き抜いてきた団塊世代が「金銭神経症」に罹っていても不思議ではない。

### 2. 高齢男性、受難の時代？

JR東日本八王子支社の調査(2011. 4. 20)によれば、ここ数年増加傾向にある駅係員への暴力事件の加害者の28%が60歳代(年齢別でトップ)。65歳以上の高齢者の殺人事件が前年比1.5倍になる(平成22年は174人で年齢別では2位)など「キレやすい」高齢者の姿が浮き彫りになっている(「世の中に取り残されて損をした」という気持ちから被害者意識が生まれ、「だから自分は何をしても許される」といった傲慢さが生まれているのではとの専門家の見解がある)。

ソーシャルスキルが男性よりもともと高く、専業主婦の生活をエンジョイすべく「居場所探し」に通じてきた高齢女性には孤立化のリスクは少ないが、定年後の夫を今更自らの「居場所」に招き入れる気持ちがないため、会社人間の傾向が強かった高齢男性は、定年後の「退屈地獄」に苛まれる懸念があると言われている。このような状態を打開すべく神奈川県逗子市は今年2月に高齢男子のソーシャル・スキル向上のために『『頼れるジイジへの道』養成講座を開催した。

### 3. 世界中の中産階級が怒り始めているが、日本は大丈夫？

米国ではリーマンショック以降、茶会党と反ウォール街運動が生じている。この2つの運動は幅広く愛されているわけではないが、かつては米国経済で最も確かな位置を占めていた白人男性の不満を表す確かなシンボルとして両者は共通すると言われている。

欧州でもユーロ分裂の危機が懸念されているが、通貨統合が崩壊した過去の例を見ると、その後に独裁主義的政権が誕生したり、社会的混乱や内戦の勃発につながっている。

ドラッカーはドイツで発生したナチズムの遠因として1923年に発生したハイパーインフレを挙げるが、「経済発展による自由と平等の実現」を信用しなくなった大衆はもはや経済発展のために犠牲になりたくないと思ったことが原因であるとしている。

日本でも「再び叛逆する団塊世代」と懸念する向きがあるが、デモが発生するためにはあくまでも個々の人間の判断に基づく行動が必要であるとすれば、「組織の論理」に埋没する高齢男子は「衆愚」であっても「個人」ではないから、デモを起こさないのではないだろうか。一方若者の間では「リーダーなんていない。強いリーダーより小さな集団で目の前の問題を解決すべき」との論調から政治的な行動が生ずる契機は少ないと思われる。

### 4. 高齢化現象に対する社会の認識・対処が足りない

吉本隆明は高齢社会について「全般に年齢の割に幼稚な人間が増える。老人問題は病気と言えば心身症、心の問題が入らない老人問題はない」と問題提起しているが、現在の高齢者は身体が急に衰えても、「自分が老人だ」と感じない人が少なくないという。

河合隼雄によれば、人生の後半は自我の確立(イデオロギー)だけでは不十分であり、悪とか死とかをその構成の中に取り入れた全体性(コスモロジー)が必要であり、その移行のためにかつての社会にはイニシエーションが存在していたが、現在は個人の責任で行うから、強い孤独感が存在する。東洋では男女の間のダイナミズムより老若の間のそれが重視されるが、高齢男子のコミュニケーション能力の低さ(コンテキストの時代性の制約に対する認識の低さ)から、現在の日本では世代を超えた対話が成立しづらい状況になっているのではないか。

### 5. 「趣味縁」社会の構築を目指して

高齢女性から「どうすれば家にこもりがちな主人を外に出せるか？」との要望がよく聞かれるようになったが、自分の嗜好性の強くこだわる傾向が強い男性は、同じ趣味を持ち、レベルの近い人とは親密になりやすい傾向がある(男はコレクション、女はコネクション)。

46歳から陶芸を始めた秋元康も「同じ趣味で同じように人生の帳尻合わせをしようとする同類の人が集まる」として、趣味を通じた「居場所」の確保の利点を指摘する。

古くはカイヨウやホイジガも「遊び」を出発点にした社会の形成の重要性を論じているが、最近はやりの「ゲーミフィケーション」も同じ文脈にあるものと言えよう。

「律令体制が崩壊した中世末期に、信条や目的ではなく趣味とか美意識でつながった人間

関係が新しい社会を構築する原動力になった」とする山崎正和は、中世末期から生まれた「社交」の比重を高めた社会を構築すべしと主張しているが、浅野智彦によれば、若者の間では「趣味縁」による社会参加が活発化して「新しい公共圏」が生まれる契機になる可能性があるという。

ダニエル・ベルは「脱工業化社会の到来」で、サービス産業のことを「人と人が競うゲーム」と定義していたが、日本を始め主要先進国で真の「サービス産業」が生まれていないのではないか。老若のオタクが提携して「趣味縁」による社会が形成されたら、オタク需要の発生で日本経済は復興するのではないだろうか。団塊世代は定年を機に若者とイコール・パートナーとなって新しい社会システムを作るべきである。

以上